

自転車社会の環境改善を目指して No.28

被災地を忘れないこと、 応援し続けることの価値 「ツール・ド・三陸」

文

特定非営利活動法人 自転車活用推進研究会会員
ツール・ド・三陸共催者 韓 祐志
一般社団法人グッド・チャリズム宣言プロジェクト代表理事

事務局：〒 141-0021 東京都品川区上大崎 3-3-1 自転車総合ビル 4 階
TEL 080-3918-2932 URL <http://www.cyclists.jp/>



岩手県の陸前高田市では、1988年から20年もの間、公道を使用した「南三陸サイクルロード」という自転車ロードレースがあったそうだ。大震災の悲劇から半年後くらいに初めてそのことを知った。冬季に走れなくなるハンデにもかかわらず、そのようなサイクルスポーツがしっかりと根付いていたことを、恥ずかしながら知らなかった。

多くの人に支えられて 第1回開催へ

私は2007年より始めた、グッド・チャリズム宣言プロジェクト(以下グッチャリと略す)という自転車のルールとマナーの啓発活動が続けながら、自転車を通じた被災地への支援はできないものかと仲間と考えていた。そんなところに、地元の愛好者の「レースを復活させたい」という声が伝わってきた。そうして被災地を自転車で走って応援するという、「ツール・ド・三陸」の大会プランがもち上がった。

そしてその約1年後の2012年9月9日、ホストライダーに日向涼子さんを迎え、片山右京・グッチャリリーダーに応援団長として就任いただき、第1回目の「ツール・ド・三陸サイクリングチャレンジ2012inり

くぜんたかた」が開催された。この時、実はまだ「第一回」と名付けることができなかった。もちろん何度でも続けて、復興とともに歩いていく大会にしたいとの思いであったが、首都圏から遠く離れた岩手県の被災地で400人しか集まらないイベントに、スポンサーとしてつく企業は少なかった。本当にいろんな意味で1回目はギリギリの開催だった。

コースは最も津波の被害を受けた市街地近くをスタートして、がれきの山が残る荒れ地を進み、海沿いの美しい景色を楽しめる広田半島を一周して戻ってくる約40キロ(2回目から50キロ)のコースと、20キロ未満で戻って来られるファミリー向けのコースとの2つの設定に。会場ではブラッキー中島さんの協力で「被災地の子供向け」の自転車教室も開設した。公道は通行止めにはできずレース、ではなくあくまでサイクリング大会ということになった。しかしながら元々のレースルートを下敷きにしただけに、アップダウンが続き、距離に安心していると痛い目に遭う? コースとなった。また警察より、10名以下の班ごとでサイクリングリーダーを付けて走るように、強く指導された。異例とも言えるサイクリングリーダーの数を必要とすることになり、毎年ボランティアを集めるのに一

苦勞することになるが、ここでは普段一緒に活動しているグッチャリの仲間たちに大いに助けられた。大会前日にコースを試走しながら、見どころポイントや、津波の最高到達点の目印などをリーダー達に伝えるようにし、彼らは本番には自分の担当グループにそれを説明したり、話をしつつメンバー同士絆を深めながら走っている。「サイクリングリーダーがコースをガイドする」というこの大会の個性はかくして生まれたのだ。まだまだ自分のペースで走り去ってしまう参加者も多いのだが「友人と来て楽しむ」というこれまでの参加スタイルではなく、「友人を作って楽しむ」という新しい大会の楽しみ方をこれからも提案していければと思っている。

また、もうひとつこの大会にとって特筆すべき特色なのが、「地元の方々の応援」である。お母さんと小学生低学年くらいの兄妹が「支えてくれてありがとう・来てくれてうれしいです」とメッセージを書いた紙を持って沿道に立っていた。参加者は皆、「逆に自分が励まされた」と目頭を熱くして戻ってきた。また、たくさんの数の大漁旗を沿道に掲げて応援して



第一回
ツール・ド・三陸
(2012)



(左) 第二回 ツール・ド・三陸 (2013)
(右) 第三回 ツール・ド・三陸 (2014)

くれる漁師宿のおじさん、毎年自作の応援グッズを持って「がんばれ～」と声をかけてくれる90歳のお婆ちゃん。「来年も来てね」と言われ「必ず！」と固く約束した。そんな1人ひとりが「南三陸」のレースを応援してきた人たちでもあった。ここ陸前高田は、そんなサイクルロードレースの文化が染みこんだ土地柄だったのだ。

海外からのビッグゲスト参加も大きな力に

話を戻そう。翌年、2回目のスポンサーのメドが立ったのが、6月の声を聞く頃。10月6日開催の、準備可能なギリギリだった。2年目が当たり前のように開催されたわけでは決してなかった。しかし、すでに1度開催した実績が、大会を良い方向へと導きはじめた。

隣の大船渡市で支援活動をしている、スポーツを通じて環境エコ社会実現を呼びかける国際的なNPO、グローバル・スポーツ・アライアンスから、あの、ツール・ド・フランス3回制覇のビッグネーム、グレッグ・レモンが参加したいと言っている、と声がかかった。そこでコースを大船渡まで延伸した上で、彼の参加を迎えた。その他にも多くの素晴らしいゲストが参集してきて、大会に大きな推進力を与えた。2回目は700名を超える参加者が集まった。もうひとつのトピックスはインタラ

クティブパートナーとして大会の盛り上げに参画しているGoogleと一緒に「ストリートビューで世界中に被災地からのメッセージを発信しよう！」と、ゴール付近の沿道に集まるよう呼びかけ、ストリートビューでその様子を見ることができるようになったことだ。公式サイトからぜひアクセスしてもらいたい。

そして今、2日間で1.5万人を集める陸前高田市最大のお祭り、「産業まつり」との併催ということで、この11月2日に3回目を開催し終わったばかりである。参加者はとうとう1,000人に到達した。前日の降雨で、会場の仮設グラウンドがぬかるんで使用できなくなるというアクシデントもあったが、奇跡的に快晴となったその日、参加者の皆は笑顔で戻ってきてくれた。今年から大会名に「第3回」と付けることにもなった。

グレッグは早くから3回目の参加も決めてくれていて、もう一人のグレッグ(ホッケンスミス)を連れてきた。ホッケンスミス氏は普段は車椅子なのだが、ハンドバイクの元世界チャンプで本物のアスリートである。ここに彼の素晴らしいメッセージを引用したい。

『サイクリングというスポーツは、私にとって人生最大の天恵であると

感じています。そして、私の日常生活の好ましい面はどれも何らかの形で自転車に乗ることに関係しています。たとえば、生涯の友と呼べる日本人の友人たちを何人も得られたきっかけは、2007年に彼等と共に富士山に登頂したことでした。私はこうした経験と交友を通して日本文化を愛し敬うようになりました。今回再び日本で自転車に乗る機会を得られ、ツール・ド・三陸に皆さんと共に参加することによってサイクリングのもつ力が地域社会の再建に役立つ様子を目の当たりにし、困難に立ち向かい続ける気概ある方たちに声援を送れることをたいへん光栄に思っております。』

被災地の皆さんや我々も2人のアメリカからの友人に勇気づけられ、彼らもきっと被災地から何かを得て帰って行ったのではないだろうか。2人のグレッグも含め、1度来た人は必ず「来年もまた来る」と言い、多くの未参加の仲間も「来年はツール・ド・三陸に参加したい」と話している。私たちもまた、スポーツイベントとしてのクオリティを高めつつ、この三陸・東北の将来、本当の復興を見据えながら、この大会を続けていきたいと思っている。読者の皆さんも来年はぜひ、被災地をその目で、その脚で感じに来られてはいかがでしょうかでしょう。

「このゴールは、次の年も走ることに、3回目の大会キャッチコピーに思いは込められている。 PP

「自転車検定」を始めました



インターネットで、いつでも受験できる「自転車検定」サイトを設けました。無料のお試し検定も行っています。自転車活用推進研究会のホームページ〈<http://www.cyclists.jp/>〉からどうぞ。